

<追悼記>賀集寛先生追悼記

著者	浮田 潤
雑誌名	関西学院大学心理科学研究
巻	46
ページ	141-141
発行年	2020-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028628

追悼記



故 賀集 寛 先生
2019年1月8日逝去

賀集 寛 先生 追悼記

総合心理科学科 教授 浮田 潤

当研究室元教授・関西学院大学名誉教授の賀集 寛先生が、2019年1月8日夕刻、ご自宅にて亡くなられました。享年91（満90歳）でした。近年は、脚を悪くされるなど、流石にお身体の衰えはあったものの、その年のお正月も変わりなく過ごされていたとのことですので、まさに突然、天に召されてしまわれました。

先生は1928年11月8日兵庫県神戸市に生まれ、兵庫県滝川中学校（旧制）および関西学院大学予科（旧制）を経て、1952年3月関西学院大学文学部心理学科を卒業されました。1954年3月に関西学院大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程を修了、文学修士の学位を取得されました。1957年3月には博士課程で必要単位を取得、さらに1965年1月に、「語連想過程分析の新しい方法」と題する論文で、関西学院大学において文学博士の学位を取得されました。

職歴については、頌栄短期大学教授、ノートルダム清心女子大学家政学部教授などを経て1972年4月関西学院大学文学部教授に就任されました。以来、25年の長きに亘って、当研究室の研究と教育に尽力されました。1997年3月、定年によって退職され、同年4月には関西学院大学名誉教授の称号を授与されました。1998年4月には川崎医療福祉大学医療福祉学部教授に就任され、2003年3月に同大学を定年退職されました。2008年4月には、その長年にわたる功績により、瑞宝中綬章を受章されています。

先生のご専門は、人間の言語や記憶のメカニズムの解明を目的とする、今の領域で言えば認知心理学でした。この領域における先生の研究上の功績は、研究に用いら

れる言語材料の特性に関する定量的研究、およびそれらのデータを用いた人間の認知機能の実証的解明というテーマに集約することができます。さらにこのテーマにまつわる先生の業績は大きく二つに分けられます。その第一は「連想機構の研究」です。先生は主として日本語の動詞を対象として、言語連想メカニズムの定量的分析を試み、その機構を精緻に解明されました。とりわけ、ある2語間の連想関係は必ずしも双方向的なものではなく、例えば語Aから語Bへの連想は生じやすいが、その逆は生じにくいといった連想の方向性が存在することを明らかにされ、さらにその特性を表す定量的測度を案出された点が傑出した功績であると言えます。第二の業績は「日本語の表記形態に関する研究」です。日本語は漢字、ひらがな、カタカナなど複数の表記形態を持つことが大きな特徴ですが、ある語が通常どの表記で書かれるかについては、ある程度共通の認識ないしは規範が存在していると考えられます。先生は共同研究者とともに、日本語の単語における各表記形態の主観的頻度を定量化するという作業に取り組み、この問題に関するおそらく日本で初めての体系的研究を行なわれました。そしてこの研究の結果から得られた主観的表記頻度が、単語の認知プロセスなど、人間の様々な認知過程に影響していることを実験的研究により明らかにされました。この研究テーマは文部省（当時）科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」（研究代表者 水谷修）の一部としても展開され、先生は研究班3・文字言語チームの研究代表者として総勢17名の研究者からなるチームを指導統率されました。

先生は教員としての在任中一貫して、その温厚な人柄と懇切な指導で多くの学生に敬愛されました。学問に対する実直で真摯な態度、しかし常にユーモアも忘れない姿勢は後進のよき目標となり、温かくそして時には厳しい指導を通して多くの人材を育てられました。教育研究者はもちろん、多くの心理学領域の専門家・実践家、そして更に広い分野で活躍する多数の卒業生を育成されました。まさに、関西学院大学文学部心理学科、そして現在の文学部総合心理科学科の礎を築かれた偉大な先達のお一人でした。先生には、当研究室の現在、そして今後のために、まだまだ教えていただきたいことがたくさんありました。そして、その歩みを、これからもしっかりと、また時には厳しい先輩として、支えていただきたいと思っておりました。そのような時に訪れた突然の訃報は、我々研究室のメンバー全てに大きな驚きと悲しみをもたらすものでした。どうかこれからも、どこかで我々の研究室を見守っててください。

賀集 寛先生の多年にわたる御功績に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。